

モンゴル語による日本語学習教材の構成法と評価

Contents Design for Learning Japanese by Traditional Mongolian and its Evaluation

斯日貢, 中平勝子, 福村好美
SIRIGONG, Katsuko T. NAKAHIRA, Yoshimi FUKUMURA
長岡技術科学大学
Nagaoka University of Technology
Email:saalchin@gmail.com

あらまし：内モンゴル自治区では、留学あるいは学位取得のために、日本語の学習者が増加傾向にある一方、学習教材は現状でも中国語が基本となっており、モンゴル語による日本語教材は未だ開発されていない。本稿では、モンゴル族が自学自習可能な日本語学習コンテンツを縦書きモンゴル語により効果的に学習するための教材構成法を提案する。具体的には、言語の類似性に基づく教材構成法の提案と異なる言語、教授法の適用による比較実験とを行い、その有効性を検証した。

キーワード：モンゴル語、日本語学習、文法対比型学習

1. はじめに

内モンゴル自治区（中国）では、日本への留学や学位取得などを目的として、日本語を学習するモンゴル族が増加している⁽¹⁾。しかし、内モンゴル自治区は公用語が中国語であるため、日本語学習をはじめとする授業は中国語によるのが一般的で、モンゴル語による日本語教材が開発されていない。これらの問題を背景にし、本稿では、モンゴル語を母語とする内モンゴル人日本語学習者に母語による母語と日本語との文法を対比した日本語学習教材の構成法と評価を紹介する。本学習システムでは、ID プロセスモデルの一般形である ADDIE モデル（分析・設計・開発・実施・評価）にしたがってコンテンツを作成した。

2. 分析

内モンゴル人学習者の日本語学習においての問題点を探し出し、その問題点に焦点を当て、コンテンツの内容を作成するために、2 回に渡り、学習内容別調査と文法項目別調査を行った⁽²⁾。その結果、学習内容別調査から難しいと答えた上位 3 項目は文法、読解、作文（64.5%、74.2%、77.4%）であること、では、項目別アンケート調査と助詞に関する学力調査として学習者に日本語格助詞のテストを実施し、「で」「に」「を」が特に理解不足であることを示した。

その原因を調べるため、モンゴル語と日本語の助詞対比を行った。先行研究にも、モンゴル人学習者の日本語助詞誤用の原因には、「母語の干渉による誤用」があると言われている⁽³⁾。

図 1 は日本語の格助詞とモンゴル語の格との対応を示したものである。テストの結果と合わせて考察すると、モンゴル人学習者にとって、日本語の格助詞とモンゴル語の格との対応が一对複数の場合にその正答率が最も低く、誤用しやすいことが分かった。

このことから、モンゴル語を母語とする学習者にはモンゴル語と日本語の文法対比学習によって多対多の関係にある格助詞を意識させる学習コンテンツ設計・開発を試みる。

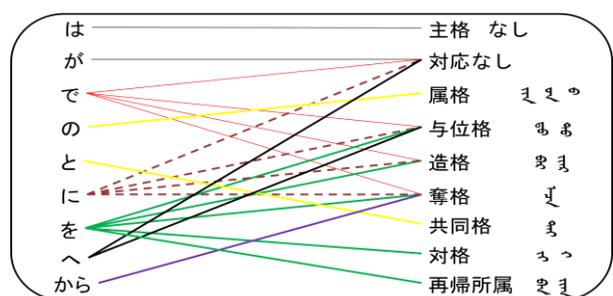


図 1 日モ助詞の対応図
(⁽⁴⁾ ⁽⁵⁾ ⁽⁶⁾ を基に著者が作成)

3. 設計・開発

調査分析の結果に基づき、コンテンツを設計・開発した。学習者の難しいと感じたところとテスト結果で実際にあった問題点に焦点を当て、格助詞「に」、「で」、「を」を例にした「モンゴル語によるモ日文法対比型学習コンテンツ」を設計・開発した。

コンテンツの構成としては、日本語の格助詞をモンゴル語の格と比較し、モンゴル語により各パターンを解説する。次に学習者の理解度を深めるために分かりやすい例文を挙げ、モンゴル語の訳を併記する。また、学習者の記憶にイメージとして残すように各例文にイメージ図を付した。そして、単元は、それぞれの格助詞について、対応するモンゴル語の格があるもの、対応するモンゴル語の格がないもの、よく間違えるパターンという3つの部分から構成する。よく間違えるパターンというのは、日本語の異なる複数の格助詞がモンゴル語の同一格に対応する場合、または日本語一つの格助詞がモンゴル語の複数の格に対応する場合に、学習者がその使い方をよく間違えるパターンを指している。

図2はコンテンツ画面のイメージである。伝統的モンゴル語は縦書きで、左から右へと改行される。コンテンツをこの特徴に合わせてデザインした。図3では、左から格助詞「に」をモンゴル語の格と比較し、総合的に説明した(図中①)。その次に、モンゴル語の与位格「 ᠠᠨᠠᠭᠤ 」に対応する場合の例文を挙げ(図中②)、またイメージ図(図中③)を加えて学習者に与える印象を深めることを心がけた。

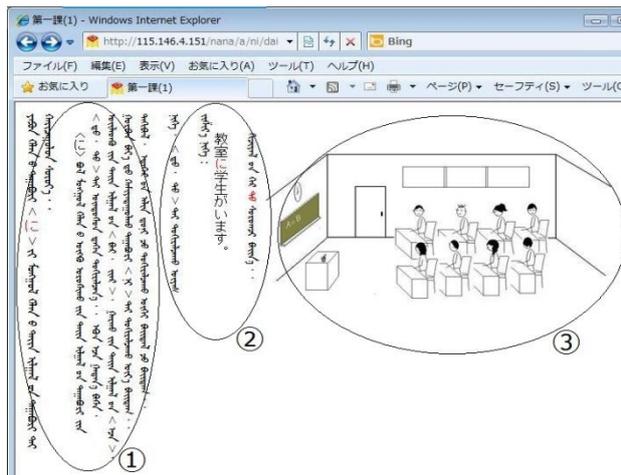


図2 コンテンツ画面のイメージ

4. 実施・評価

開発したコンテンツを用い、助詞に関する学力調査に協力した在日内モンゴル人大学生 28 人を対象に2グループに分けて評価実験を行った。実験では、本研究で提案した「モ日文法対比型学習コンテンツ」と従来型の「中日文法対比型学習コンテンツ」との2種類のコンテンツ構造を用い、それぞれのコンテンツの使用言語をモンゴル語、中国語2つの言語で実施した。すなわち、「モンゴル語によるモ日文法対比型」、「モンゴル語による中日文法対比型」、「中国語による中日文法対比型」、「中国語によるモ日文法対比型」の4種類の学習コンテンツを学習者にそれ

ぞれ学習させ、演習問題を回答してもらった。上に述べた従来型の「中日文法対比型学習コンテンツ」というのは、今まで中国内のモンゴル族が日本語の学習時に使用されているコンテンツである。

実験で使用したコンテンツ学習後の成績を分析し、各コンテンツの学習効果を t 検定により比較評価を行った。その結果、「モンゴル語によるモ日文法対比型」学習コンテンツを学習後の成績は最も高く、平均点は 76.9 点である。これは、他のいずれのコンテンツとも 1%水準で有意な差があり、学習効果ももっと高いことが分かった。換言すれば、モンゴル人学習者にとって、本研究で提案した「モンゴル語によるモ日文法対比型」学習コンテンツは従来型の学習コンテンツより効果的であることを明らかにした。

次に成績が高いのは、「中国語によるモ日文法対比型」学習コンテンツで、平均点は 72.1 点である。これは、従来型の「中国語による中日文法対比型」学習コンテンツの成績より高いが、それとの間で有意な差が見られなかった。

5. まとめ

モンゴル人学習者に効果的な日本語学習方法を提案するため、ADDIE モデルを用い、そのプロセスである分析・設計・開発・実施・評価に従い、在日内モンゴル人大学生を対象にアンケート調査およびテスト問題を実施した。その結果に基づき、格助詞を例にした「モンゴル語によるモ日文法対比型学習コンテンツ」を設計・開発した。設計したコンテンツを用い、同じ内モンゴル人学習者を対象に評価実験を実施し、評価した。

その結果、母語によるモ日文法対比学習方法がモンゴル人学習者にとってより効果的であることを明らかにした。

今後の課題として、助詞を例にした「モ日文法対比型学習コンテンツ」を拡張し、助詞以外の文法項目についての学習コンテンツを作成する予定である。

参考文献

- (1) 内蒙古大学外国語学院, 馬賀, 「内蒙古地区日语的发展情况」, 2008
- (2) 斯日貢, 中平勝子, 福村好美「モンゴル語による日本語学習方法に関する一検討」, 教育システム情報学会, 第36回全国大会講演論文集
- (3) 小林幸江, 「モンゴル人に対する日本語教育の研究」
- (4) フフバートル著, 「モンゴル語基礎文法」, 株式会社インターブックス, 1997年
- (5) 富田隆行: “文法の基礎知識とその教え方”, 凡人社, (1992)
- (6) Cinggelтай: “A Grammar of Modern Mongolian”, 内モンゴル人民出版社, (1999)